

青木繁「海の幸」オマージュ展 2014 に寄せて

吉武研司 (NPO法人青木繁「海の幸」会理事、女子美術大学教授
青木繁「海の幸」オマージュ展責任者
独立美術協会会員 日本美術家連盟会員)

2010(平成 22)年、青木繁が「海の幸」【表紙1】を描いた館山市布良の「小谷家住宅(館山市指定文化財)【表紙2】」を復元、保存、公開を目的に、NPO法人青木繁「海の幸」会が発足しました。その関連事業として、全国巡回で開催してきたのが青木繁「海の幸」オマージュ展です。

この間、全国から文化財保存にご賛同いただいた当会のメンバーは、画家、美術評論家、美術関連の方々総勢 550 人が参集しました。館山市、館山市教育委員会の支援を受けながら、小谷家および館山の青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会と協働して、「小谷家住宅」保存の道筋を整えてまいりました。

オマージュとは、尊敬する作家や作品に影響を受け、あるいは敬意をもって芸術作品を作ることを意味します。この活動を通じて、青木繁が滞在し「海の幸」を描いた「小谷家住宅」の修復基金を創出し、保存の意義を多くの方に知っていただく機会です。チャリティ売上の一部は、館山市ふるさと納税を通じて寄付しています。

いつもは別々に活動している作家達が、青木繁「海の幸」という一点で結びつき、ハイブリット(芸術院会員から無所属まで、日展あり在野団体あり)に混ざり合いながら発表できるという興味深い企画です。

3年目を迎える 2014(平成 26)年は、これまでの東京展(銀座)・京都展・館山展に加え、福岡展・田園調布展が加わり、拡がりが見えています。

「海の幸」が生まれた館山と、青木繁が生まれた福岡で、それぞれの在住作家との合同展覧会が実現するのは画期的なことです。特に館山展では、館山美術会との連携により、館山市コミュニティーセンターの会場で 100 人近い作家が集結することになりました。面白さや楽しさが、さらにもう一つの拡がりを見せたことになりました。開催にあたり、東京展会場となる永井画廊の永井龍之介先生は、次のような文章を寄せられています。

日本近代絵画の至宝『海の幸』が制作された館山市布良の小谷家の復元、保存、公開を目的にNPO法人青木繁「海の幸」会が発足して以来、この貴重な

文化遺産を守るために立ち上がった「海の幸」会会員有志による展覧会を、東京、京都、館山で開催、このたび6回目を迎えます。

海の恵みに感謝をささげながら暮らしてきた日本人の生活の原点を想起させ、多くの画家、ファンから憧れ、賞賛を持って迎えられ、愛されている「海の幸」発祥の場を保存していくことは、私たち日本人の心の故郷を守ることに他なりません。

「海の幸」は、日本人にとって、とても大事な意味を持っていると考えております。近世の江戸時代から、明治維新(1868 年)を迎え、近代という新しい時代に突入し、欧米に追いつき追い越せという中で、1904 年に「海の幸」が制作されました。日本人にとって少しずつ世界が見え始め、自信を持つようになった頃です。

「近代日本の青春」と「青木繁の 22 歳の青春」が交差し、スパークし、「日本の自画像」が「海の幸」として輝いて表現されているように思います。

その頃の日本は、日露戦争がはじまり、続く日本海海戦で勝利という時代状況はもっと考えてもいい時代精神だと思います。

「時代の息吹きのリズム」と「海の幸の絵のリズム」は響き合っていると思います。

ここで、「海の幸」が誕生した小谷家住宅の保存運動にかかわっていった、私個人の流れをたどることによって、小さな流れがだんだん大きくなっていく形を確認しておきたいと思います。

私は 50 年前、佐賀西高校(佐賀県)の 2 年生で美術部部員でした。隣の久留米(福岡県)にある石橋美術館で運命的な出会いをすることになります。春休みだと思いますが、美術部の 10 人位で出かけました。考えてみれば、「世界に続く窓を覗いた」といえるでしょう。

西欧と日本の絵がいろいろある中で、「青木繁」という人の「海の幸」の絵に感動し、脳に焼き付け、増殖していった感じがありました。これが「熱」を持った最初でし

た。高校3年では美大受験を志すようになり、佐賀大学特設美術科に入学します。

青木繁は、「海の幸」制作の後、東京を離れ、九州を放浪しています。そのとき、佐賀は重要な舞台になります。私の実家の傍を流れる多布施川を散歩していますし、そういう文章も残っています。憧れの先輩としての存在を感じ始めます。

そして「70年安保」の前、「佐賀大学闘争」が始まりました。ノンポリである私も変に巻き込まれ、佐賀大学に3年半在籍した後、中退することになりました。それから上京し、浪人して、東京芸術大学に入学したのです。これで、青木繁の後輩になりました。

そのあとは、縁があって女子美術大学に奉職するようになり、春のスケッチ旅行で館山の国民宿舎・鳩山荘に行くようになりました。ところが閉鎖となり、探しあぐねた先に、布良の「安房自然村」と出会ったのです。

「ここがあの『海の幸』が描かれた現場だよ」という話を聞き、びっくりしました。阿由戸の浜【表紙①】に立った時の感動、鳥肌が立った時の身体感覚をいつも思い出します。2000年の頃です。毎年2年生の学生を連れていくようになり、「小谷家」と出会いました。

ここで描いたのか！ この光か！

この壁に触ったのか！ この道を歩いたのか！

この海を見たのか！ この港が大漁に湧いたのか！

驚きと感動が尽きず、積み重なり、この気持ちの拠り所として「小谷家」を残したいという願いに変わっていききました。

毎年秋、私が所属し出品している独立展で、画家の吉岡友次郎さんと出会うことになります。編集関係の仕事で退職して、油絵を再び描き始め、独立展に出品したところでした。彼は、青木繁と同じ久留米出身で、偶然にも、佐賀大学特美中退の私にとって10年先輩でもあったのです。これが、吉岡・吉武の「よしよしコンビ」の始まりです。

「小谷家」保存の話は吉岡さんにも火がつき、逆にあおられるような格好になりました。そこで、女子美術大学名誉教授の入江観先生に相談し、女子美術大学理事長の大村智先生（文化功労者）にお願いし、NPO法人「海の幸」会の構想が生まれました。

北里大学名誉教授でもある大村先生は、アフリカの2億人の生命を救ったという世界的な薬学者で、その功績は現在ノーベル賞候補といわれています。このとき、

元東京芸術大学学長の平山郁夫先生（文化勲章受章）と奥谷博先生（文化功労者・芸術院会員・独立美術会員）が理事になれることを条件に、理事長を引き受けていただきました。なお、入江先生には副理事長をお願いしましたが、残念ながら平山先生は法人立ち上げの前にご逝去されました。

加えて、井上哲郎（ギャラリーサムホール）、大津英敏（芸術院会員・独立美術会員）、金澤毅（評論家）、川村良紀（日本水彩連盟理事）、絹谷幸二（芸術院会員・独立美術会員）、久野和弘（武蔵野美術大学名誉教授）、甲田洋二（武蔵野美術大学学長・画家）、斎藤研（女子美術大学名誉教授・独立会員）、酒井忠康（評論家・世田谷美術館館長・「海の幸」会副理事長）、佐藤一郎（東京芸術大学名誉教授）、佐々木豊（国画会会員）、須藤美保（独立会員）、中山忠彦（芸術院会員・日展理事）、塗師祥一郎（芸術院会員・日展理事）、吹田文明（版画家・日本美術家連盟理事）、馬越陽子（独立会員）、南寫宏（評論家・女子美術大学教授）、村田慶之輔（評論家・元岡本太郎美術館館長・「海の幸」会副理事長）、本江邦夫（評論家・多摩美術大学教授）、ワシオ・トシヒコ（詩人・評論家）など著名な先生方も賛同され、理事になっていただきました。こうしてNPO法人の組織が固まってきたのです。

2008（平成20）年9月28日に吉武・吉岡の2名で、青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会（館山の地元保存会）発起人総会に出席し、館山との協働関係が具体的に変わってきました。

2010（平成22）年1月12日、NPO法人青木繁「海の幸」会が創立されました。

翌年3月11日に東日本大震災が起き、基金活動が一時停止しましたが、総会でチャリティのオマージュ展が提案されたのです。

その後、会員の寄付や石橋財団の援助もあり、これまでに2500万円ほどの基金が集まりました。

そして2014（平成26）年4月、待望の「小谷家」修復の第一歩を踏み出すことになりました。あと2000万円ほど額を目指し、地元の方々と共に協力しあって歩んでいきたいと思っています。

考えてみれば、1904年、22歳の青木繁が描いた「海の幸」が、100年経ってもこれほどの人達を動かし続けるというのは凄いことです。これは「それぞれの人達の青春が蠢いている」ことの証明だし、素晴らしいことだと思います。素晴らしい施設ができることを期待しています。頑張りましょう！